

ルー・リードの翻案「レイヴン」に関する一考察

A Study of “The Raven” adopted by Lou Reed

川野 礼音

Abstract

This paper aims to examine “The Raven” adopted by Lou Reed (1942—2013) in terms of the relationship between the poet and his mentor Delmore Schwartz (1913—1966). Focusing on the difference of the text between the original *The Raven* and the adaptation “The Raven”, it is clear that the man in “The Raven” represents Reed himself and that the raven is a symbolic representation of Schwartz. It can also be pointed out that “The Raven” has structural similarities to Reed's lyric “My House”, which the poet formerly dedicated to Schwartz, and that “The Raven” seems to be a re-creation of the lyric. As a sequel to these comparative examinations, it is concluded that the poet utilizes the loss of precious one, a theme of *The Raven*, as his personal condolence on Schwartz in ‘The Raven’. The adaptation shows Reed's invariable respect toward his mentor.

Keywords: E. A. Poe, “The Raven”, Lou Reed, Delmore Schwartz

序

本稿では、ニューヨーク出身のミュージシャンであるルー・リード(Lou Reed, 1942—2013)の「レイヴン」(“The Raven”, 2012)について、テキストをリードとその師デルモア・シュヴァルツ(Delmore Schwartz, 1913—1966)との関係に注目して考察する。

¹「レイヴン」は、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809—1849)の『大鴉』(*The Raven*, 1845)を原作とする翻案作品である。²ポーはゴシックホラーや心理小説の大家として、あるいは SF 小説や探偵小説の始祖のひとりとして、文壇の中でも独特の存在感をもつ作家である。その影響力は今なお強く、文学のみならず他の芸術分野からもポーの影響を受けたという声は後を絶たない。特に注目に値するのはポピュラーミュージックで、ポーの作品や作家自身をモチーフにした楽曲が数多く存在する。例えばビートルズ(The Beatles)の“I Am the Walrus”(1967)、ジョーン・バエズ(Joan Baez, 1941-)の“Annabel Lee”(1967)、アイアン・メイデン(Iron Maiden)の“Murders in the Rue Morgue”(1981)、宇多田ヒカル(1983—)の“Kremlin Dusk”(2004)など、洋の東西、楽曲のジャンルを問わず挙げることができる。ポーの作品が、ポピュラーミュージックの担い手から今なお評価されているという事実は、一連の作品が芸術それ自体として懐が深く、広く現代的な感性の共感を得ることが可能であることを示している。ポーには芸術家の創造性に訴えかける、普遍的な魅力が存在しているのだと言えよう。

ポーに着想を得た作品を遺しているミュージシャンの中でも、ひととき強い威光を放つのがリードである。リードは 1964 年に結成された、ロックに大きな影響を与えるグループ、ヴェルヴェット・アンダーグラウンド(The Velvet Underground)のフロントマンであった。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドは、性やドラッグ、アルコールといった、当時禁忌とされていた社会の暗黒面を大胆に切り取った歌詞に大きな特徴のひとつがあるが、そこにはリードがシラキュース大学在学中に詩作を学んでいた経験が少なからず生かされていると言えよう。1960 年代初頭にあって、文学的意識や政治意識など、それまで小説や映画といった一部の芸術にしか認められていなかった「現実の人生」を

表現する自由をロックンロールに初めてもたらし、これを価値ある芸術の高みへ最初に押し上げたといえるのが、リードの綴る歌詞であった。³ リードは自らを何よりも詩人であるとし、作曲もその他の創作活動も、自分にとってはすべてライティングだと語っている(Simon)。このように、表現における詩の可能性を重視していたリードが、同じく至高の美を詩に求めたポーに対して共感したことは、ひとつの必然であった。⁴

「レイヴン」は舞台・CD・2度の書籍化と、メディアを変えつつ4度にもわたって発表されており、⁵ リードにとって特別な思い出のあった作品であることが分かる。詩人の「レイヴン」に対する態度について、これまでの作品群における位置づけなどから論じたものはあったが、テキスト自体に注目した考察はほとんど行われてこなかった。そこで改めてテキストを検証したところ、「レイヴン」には『大鴉』の翻案という形式の裏に、リード本人とその学生時代の指導教官であり友人でもあった詩人・作家のデルモア・シュヴァルツのイメージが重ねられているように読めるのだ。以下その根拠を検証していく。

1. 「レイヴン」に重ねられたリードとシュヴァルツのイメージ

原作『大鴉』は、全108行の物語詩である。大切な人を失った悲しみに沈む男のもとに、‘Nevermore’ということばを発する大鴉が現れ、会話を試みるうちに男は次第に精神を焦燥させていく。ここにはポーの最も得意とする「最愛の人を失った悲しみにくれる男」というモチーフが設定されている。この「大切な人を失う悲しみ」は、単なる詩作上のアイディアではなく、ポー自身の経験に基づくものであり、『大鴉』にも離別の苦悩が反映されている。リードの「レイヴン」でも、表面上は原作と同じくレノアを失った悲しみが歌われている。しかし「レイヴン」では、レノアに対する弔意の形を借りて、表層下にてリードの個人的な哀悼の意も同時に歌われていると考えられるのだ。リードが弔意をあらわす対象としてまず連想されるのが、詩人が1960年から64年までシラキュース大学にて英文学を専攻していた際の指導教官であり、友人でもあり、創作上の師でもあった文学者のシュヴァルツである。

シュヴァルツは 1937 年に短編小説「夢の中で責任が始まる」(“In Dreams Begin Responsibilities”)で文壇に登場した。⁶T.S.エリオット(Thomas Stearns Eliot, 1888—1965)やエズラ・パウンド(Ezra Weston Loomis Pound, 1885—1972)をはじめとする文人たちから高く評価され、時代の寵児として名を馳せた。しかし作家としての名声は長くは続かず、アルコール中毒に陥るなどして次第に身を持ち崩していく。大学講師の職も、生活に困窮して選んだものであったが、奇しくもリードにとってはこれが生涯忘れ得ぬ師と出会う機会となった。シュヴァルツは当時まだ学生であったリードにすでに創作の才能を認めていたようで、‘you Lou must never write for money or I will haunt you (決して金のために書くようなことはするんじゃないぞ、そんなことをしたら呪ってやるからな)’とシュヴァルツなりのユーモアをこめた言葉を残している(*In Dreams Begin Responsibilities and Other Stories* viii)。またリードもシュヴァルツから創作上の技法を多く学び、大変尊敬できる師であったことを公言している。⁷

このふたりの強い結びつきを考えたとき、「レイヴン」には亡き師を回想するリードの姿が垣間見えてくる。

Hovering, my pulse was racing, stale	足元も覚束ず、脈拍が高まる、啞え
<u>tobacco</u> my lips tasting,	た <u>煙草</u> が味気ない
<u>Scotch</u> sitting upon my basin,	たらいに置かれた <u>スコッチ</u> 、昨夜か
remnants of the night before ⁸ . (469)	らの飲み残し

上では「レイヴン」の第3連を抜粋している。模糊とした意識の中、酒を前にして煙草をくゆらせる男の姿が描かれている。ここで注目すべきは、下線部の酒と煙草の演出である。原作にはどちらに関する記述も存在せず、これは翻案で新しく書き加えられた演出である。つまりこの演出には翻案者によるなんらかの意図がある。特にこの男の前にある酒がスコッチであることは注目に値する。スコッチはリードが特に好んだアルコールで、詩人が手掛けた歌詞の中にもしばしば見られる表現である。

Some like wine and some like hops	ワイン好きがいりゃホップ好きもいる
But <u>what I really love is my scotch</u>	だが <u>俺はなんといってもスコッチ</u>
It's the power, the power of positive	これこそパワー、ポジティブな酒のパ
drinking (Reed 236)	ワーなのさ

引用はリード1980年のアルバム *Growing Up in Public* に収録された“The Power of Positive Drinking”の歌詞である。ここではアルコールの効能を称えるとともに、スコッチこそ我が酒と歌われている。これは実際の詩人の姿とも一致し、事実スコッチを煽りながらインタビューを受けるリードの姿が様々なところで証言されている。例えば作家の村上龍(1952—)は、リードと対談を行った際、スコッチをダブルのストレートで次々とあおっていくその姿に驚嘆したと語っている(ドゲット 17-8)。

リードの代名詞とも言えるスコッチだが、この酒はまた、詩人にとってシュヴァルツと強く結びついたものでもある。リードはシュヴァルツの没後に出版されたシュヴァルツ短篇集に序文を寄稿しているが、その中では以下のようにスコッチに関するエピソードが綴られている。

I met you in the bar where you had just ordered five drinks. You said they were so slow that by the time you had the fifth you should have ordered again. Our scotch classes. (Schwartz viii).

バーで会ったことがありましたね。あなたはちょうど5杯もオーダーしたところだった。その酒が全然効いてこないものだから、5杯目が来る前にもう一回オーダーし直しておけばよかったなんて、あなたは言っていた。私達のスコッチ教室。

シュヴァルツは大学近くのバーに学生を集め、ジョイスやイエイツについて議論をしつつ酒を酌み交わす、というのが習慣だったという。この一節もそんなある日の出来事を

綴ったものと思われるが、この数行からもシュヴァルツが酒豪であったことや、スコッチを好んだこと、そして2人にとってスコッチがコミュニケーションの潤滑剤のような役割を果たしていたであろうことが伺える。シュヴァルツのアルコール嗜好は、後年身を持ち崩す原因のひとつとなるほどで、シラキウス大学に赴任してきた頃にはすでにアルコール中毒に近い状態にあったという。自らの指導教官がそのように痛飲している姿は、リードにとってもとりわけ印象的だっただろう。

また煙草についてもリードは愛煙家として知られる人物で、例えば自身の出身地であるブルックリンを舞台としたメタ・ドキュメンタリ映画『ブルー・イン・ザ・フェイス』(*Blue in the Face*, 1995)に街の住人役で出演した際にも、煙草への愛着を滔滔と語っている。リードを知る人物であれば、煙草を啜えたアイコンとしての詩人のシルエットが容易に浮かんでくるだろう。

以上のように、スコッチと煙草という演出の背景を考えると、「レイヴン」の男にリード本人の姿が重なって見えてくる。詩人がいつものように煙草を吹かしながら亡き師を偲びつつ、思い出のスコッチに沈溺している、というような情景が想像できるのである。

男をリードとして見るとき、翻案の第4連が原作と比べて死者の到来をより強く暗示している句として読むことができる。

『大鴉』第3連

“T is some visiter entreating

entrance at my chamber door —

Some late visiter entreating entrance

at my chamber door; —

This it is and nothing more.’ (29)

“そう、誰かがドアの前に来たのだ—

「レイヴン」第4連

“Tis some visitor entreating

entrance at my chamber door—

Some lost visitor entreating

entrance at my chamber door—

This it is and nothing more.” (497)

“そう、誰かがドアの前に来たのだ—

深夜の来客が訪ねてきただけだ—

道に迷った誰か（亡きあの人？）が訪

ねてきただけだ—

ただそれだけ、それだけのこと”

ただそれだけ、それだけのこと”

ここでは原作の第3連と、その対になる翻案第4連を引用している。原作下線部‘Some late visitor’が、翻案下線部では‘Some lost visitor’に書き換えられている。原作の‘Some late visitor’は、「夜更けに現れた訪問者」と解釈するべきである一方、翻案の‘Some lost visitor’は、「迷い込んできた訪問者」という以外にも、「この世から失われた訪問者」「死んだ訪問者」というニュアンスも同時に伝えている。‘late’にも人物を「故…」とする用法はあるが、‘lost’の方がより感覚的に喪失を表現する単語だと言えるだろう。前後の詩句からみれば、‘lost’は「道に迷った」と解釈するのが第一義的ではある。しかし第3連とのつながりを考慮して、男を故人への想いに沈んでいたリードだと考えると、‘Some lost visitor’は単に迷いこんだだけの訪問者を指すだけではなく、「この世を去った人間が訪ねてきた」というような含みも示しているように読めるのだ。

またこの‘lost’という単語は、原作第14連でも‘Quaff, oh quaff this kind nepenthe and forget this lost Lenore! (飲め、この慈悲深き忘却の秘薬を飲み下し、亡きレノアを忘れさせ給え!)’ (32)のように、「今は亡き」レノアを表現する際にも使われている。

『大鴉』におけるキーパーソンであるレノアという死者を形容するのに使われている点からも注目に値する単語だ。原作を知る読者であれば、翻案の‘Some lost visitor’という表現に死者のニュアンスを見出すのは難くないだろう。『大鴉』で男が亡くして偲ぶのはレノアだが、「レイヴン」の男にリードの姿が重ねられているなら、その偲ぶ対象であるレノアにシュヴァルツが重なってくる。原作の「レノアを悼む男」という構図の中に、翻案では「シュヴァルツを悼むリード」の姿が二重写しになって見えてくるのである。

2. 「レイヴン」の大鴉が象徴するもの

続いて「レイヴン」のキーワードである大鴉が象徴する対象について考察していく。
大鴉は原作・翻案のどちらにおいても作品構造の主軸となっている。原作の大鴉について、原作者ポーは次のように解説している。

So far, every thing is within the limits of the accountable — of the real. A raven, having learned by rote the single word ‘Nevermore,’ and having escaped from the custody of its owner, is driven at midnight, through the violence of a storm, to seek admission at a window from which a light still gleams — the chamber — window of a student, occupied half in poring over a volume, half in dreaming of a beloved mistress deceased. (Poe 440)

この点までは、すべてが説明可能な範囲内にある一つまり現実の領域内にある。“Nevermore”という一語を覚えこんだ一羽の鴉が、飼い主のもとを逃れたものの、折からの嵐に巻きこまれて真夜中の闇間をさまよううちに、まだ明かりがもれている窓を見つけて、そこから入れてもらおうとする—それは読書にふけりながらも、死んだ愛人を夢見る学生の部屋の窓だった。(八木敏雄訳)

ポーによれば、原作の大鴉は何らかの理由で‘Nevermore’という単語を発することを覚えなかった現実の鴉なのだという。ポーはさらに続ける。

The reader begins now to regard the Raven as emblematical — but it is not until the very last line of the very last stanza, that the intention of making him emblematical of Mournful and Never-ending Remembrance is permitted distinctly to be seen: (Poe 442)

読者はここにきて鴉を象徴的なものと考え出す—しかし、最後の連の最後の詩行まで来てようやく、大鴉を決して忘れ得ぬ悲しき思い出の象徴とすることがこの詩の意図であるのが明らかになる。(八木敏雄訳)

最後の連の最後の行まできて、実は「決して忘れ得ぬ悲しき思い出の象徴」なのだという正体を、突如あらわにするのがポーの設定した大鴉だ。それまで現実の鴉だったものが、にわかにただの鴉ではなく悲しみの象徴物となるのである。このように、物語の終盤で設定の大転換を起こして象徴性を発揮するのが原作の大鴉だが、翻案では大鴉の発揮する象徴性がはじめから際立っているのである。以下‘Quoth the Raven ‘Nevermore.’’というリフレインに注目し、原作と翻案でそれぞれ対応する連の大鴉を比較する。

『大鴉』第 15 連

‘(...) Is there — is there balm in Gilead? — あれは—あの靈薬はないのか—教
tell me tell me, I implore!’ えてくれ、頼む、答えてくれ！

Quoth the Raven ‘Nevermore.’ (32) 大鴉は言う、“Nevermore”

『大鴉』第 17 連

‘(...) Take thy beak from out my heart, and 貴様のその爪を我が胸より引き抜
take thy form from off my door!’ け、しかる後にその扉より何処なり
へと消え失せろ！

Quoth the Raven ‘Nevermore.’ (33) 大鴉は言う、“Nevermore”

まず原作では大鴉の発する‘Nevermore’ということばが男の問い、あるいは呼びかけに対する返答と取れるようになっている。ポーの説明によれば、大鴉のこの反応は男の呼びかけに対する鸚鵡返しという機械的な反応であり、現実の鴉の枠内に収まる行動である。しかし翻案では大鴉の反応が若干異なる。

「レイヴン」第 10 連

I smoke and smoke the blue vial’s glory to 幾度も喫む、蒼き壺より立ち昇る至福
forget—at once!!!—the base Lenore— を——思いに！！！！——いやしきレノ

アを忘れんがため—

Quoth the Raven, “Nevermore.” (499)

大鴉は言う、“Nevermore”

「レイヴン」第 11 連

The conscience showing not a trace—

良心などかけらもない—

Quoth the Raven, “Nevermore.” (499)

大鴉は言う、“Nevermore”

翻案では男は大鴉に呼びかけているのではなく、独白を行う形になっている。これに対する大鴉の‘Nevermore’も、男を俯瞰するような、あるいは一方的に語りかけるような、第三者的視点からの独白であるようにとれる。少なくともこれが原作のように、男の呼びかけに対する鸛返しへの反応であるようにとはとれないだろう。ここで鴉はその超自然性をすでに垣間見せており、自らが鴉以外の何者かであることを示唆している。つまり原作の大鴉は、あくまで一般的な鴉でありつつも物語の最後に設定の大転換を行う手法でその象徴性を印象づけているが、翻案の大鴉ははじめから自らが鴉以外の象徴的な何かであることを示唆している。鴉ではない何かが鴉の姿を借りてあらわれているのだという象徴性を、原作よりもさらに強調しているのである。

また次の引用のように、翻案の大鴉が‘Nevermore’以外にも‘Pathetic’ということばを発する点も注目に値する。

「レイヴン」第 9 連

That one word, as if his soul in that one

たった一言、まるで心の底から絞り出

word he did outpour. したかのようなその一言

Pathetic!!!

無情!!!

Nothing further then he uttered, not a

それ以上語ることはなく、身じろぎ—

feather then he fluttered— (498-9) つもしはしない—

この‘Pathetic’が男に向けられたものなのか、あるいは大鴉の心中を吐露するものなのか

は定かでない。しかし、いずれにせよこの‘Pathetic’ということばが不吉な大鴉のイメージと重なり合い、原作で悲しみの象徴とされている大鴉の機能が、翻案ではより前面に印象づけられるのである。また原作の大鴉は、「ことばを鸚鵡返しする単なる鴉」という公式の設定が与えられているため、‘Nevermore’以外を口にすることはないが、翻案の大鴉はこれに加えて‘Pathetic’ということばも発することで、自身が複数の単語を知る知性を備えた鴉以上の存在であることも同時に伺わせている。第 7 連の‘This fowl and salivating visage insinuating with its knowledge—(その鴉、口から涎を垂らしつつもどこか知性を感じさせる佇まい—)’(498)という表現も、大鴉が知性を備えた存在であることをほのめかしている。原作の大鴉は設定上ことばを鸚鵡返しするだけの一般的な鴉であるがゆえ、知性を備えていることを示唆するような表現はされていない。知性を伺わせる演出は翻案の大鴉にのみ与えられており、リードの創作上の意図を強く表現している。

以上のように、原作と翻案に見られる大鴉の相違点から、リードは「悲しみの象徴」という原作の大鴉の設定をさらに強調し、そこに「自ら悲しみを訴えかける知性を備えた存在」という設定を加えることで、「レイヴン」の大鴉をシュヴァルツの魂の象徴として描いていると考えられるのだ。大鴉をシュヴァルツの魂と考える根拠は、以下に考察する詩人の過去作品にも辿ることができる。

3. 「レイヴン」と「マイ・ハウス」の相似点

大鴉とシュヴァルツを繋ぐ手がかりとなるのが、リード 1982 年のアルバム『ザ・ブルーマスク』(*The Blue Mask*)に収録されている「マイ・ハウス」(“My House”)である。この曲は歌詞中に「デルモア」と名前を挙げ、亡き師について歌いあげている。「マイ・ハウス」には後の「レイヴン」と共通する演出がいくつも見られる。その中には「シュヴァルツの魂を象徴する大鴉」という構図の原型とも言える表現が見られるのだ。以下「マイ・ハウス」の全篇を引用する。

The image of the poet's in the breeze

Canadian geese are flying^① above the trees

A mist is hanging gently on the lake

My house is very beautiful at night

My friend and teacher occupies a spare room

He's dead—at peace at last the wandering
Jew

Other friends had put stones on his grave

He was the first great man that I had ever
met

Sylvia and I got out our Ouija Board

To dial a spirit—across the room it soared^②

We were happy and amazed at what we saw

Blazing stood the proud and regal name^③

Delmore

Delmore, I missed all your funny ways

I missed your jokes and the brilliant things
you said

My Daedalus to your Bloom, was such a
perfect wit

And to find you in my house makes things
perfect

I've really got a lucky life

My writing, my motorcycle, and my wife

And to top it all off a spirit of pure poetry

そよ風にたゆたう詩人の面影

雁が林の上を舞う

そつと霞掛かる湖上

私の家は夜がとても綺麗だ

友人であり師でもあるあの人が空き部屋に
いた

もうこの世にはいない—ようやく安らかな
眠りについた根無し草のユダヤ人

他のみんなは墓前に石を積んでいった

初めて会った偉人はあの人だった

シルヴィアと一緒に降霊盤を取り出す

魂を呼び出すために一部屋中を駆け巡る魂

その光景に心が躍り目を見張った

まばゆいばかり、誇り高く誰にも恥じること

のないデルモアの名がそこに

デルモア、あの粋狂ぶりが忘れられない

その笑い話、数多の至言が胸につのる

ディーダラスの僕からブルームのおまえへ、
なんて最高に気が利いていた

あなたがここにいれば他に何もいらぬ

まったく拾い物のこの人生

詩があつて、バイクがあつて、妻がいる

その上純粹無垢なる詩のところが

<u>Is living in this stone and wood house with</u>	<u>この石木造りの家で私とともにあるのだから</u>
<u>me</u>	<u>ら</u>
The image of the poet's in the breeze	そよ風に揺らめく詩人の面影
Canadian geese are flying above the trees	雁が林の上を飛んで行く
A mist is hanging gently on the lake	湖にふわりと霞が掛かる
<u>Our house</u> ^④ is very beautiful at night	<u>私たちの家</u> は本当に夜が綺麗だ
(Pass Thru Fire 242)	

まず①「風の中の詩人の面影」という表現や雁の飛ぶ姿は、「レイヴン」において風とともに現れる大鴉、その大鴉が象徴的にあらわすことになるシュヴァルツ、というイメージに対応するところがある。歌詞を先に進むと、シュヴァルツへの想いがつづられるとともに、それを懐かしむ家の住人が、②降霊盤を使ってその魂を呼び出すという記述がある。シルヴィアとはリードの当時の妻の名であり、語り手がリード本人であると考えていいだろう。この魂を呼び出すという行為が「マイ・ハウス」の主軸となる出来事だが、‘across the room it soared’という表現、特に‘soar’という単語は、魂がただ現れるのではなく、鳥のように部屋の中を飛翔する様子を連想させる。これは「レイヴン」第7連で、‘Just one epithet I muttered as inside I gagged and shuddered with manly flirt and flutter / In there flew a stately Raven, Sleek and ravenous as any foe. (一言呪いの言葉を吐き捨て、部屋に戻った私は悪寒に襲われ慄いた、雄々しい羽の羽ばたきに / 部屋を舞うのは目を見張るような大鴉、その体はまさに鴉の濡羽色、猛々しさはまるで仇を前にしているかのよう)’ (498)のように、窓を開けた瞬間、部屋に飛び込んできてその中をあちこち飛びまわる大鴉の姿に重なる。このように、「レイヴン」の大鴉は「マイ・ハウス」の‘spirit’に対応していると考えられる。「マイ・ハウス」の構図に従うなら、「レイヴン」の大鴉はシュヴァルツの魂がリードの思いに応じて大鴉に姿であらわれたことを暗示していると考えられるのだ。

ここで「レイヴン」の大鴉が‘Pathetic’と叫びを上げている点を思い出されたい。大鴉

がシュヴァルツなのであれば、これは不遇の晩年を送ったシュヴァルツの無念を大鴉の口を通して語らせているものと取れるだろう。若くして手に入れた文学的名声に、かえってその後をかき回されるような人生を送ったシュヴァルツは、後年特定の住居すらもつことなく、最後はホテルで横死することになる。遺体は身元不明で数日間も引き取り手がなく、最終的に遺体安置所へ行ったのはリードであった。師の無念を誰よりも実感していたのがリードだったと言える。『大鴉』の基軸となる鴉の原作設定を大胆に改変して語らせた、この‘Pathetic’という言葉には極めて重みがあると捉えるべきだろう。

‘Pathetic’の前行に‘that one word, as if his soul in that one word he did outpour’とあるように、これはまさに大鴉、すなわちシュヴァルツが心の底から絞り出したかのような一言なのだ。大鴉が知性を感じさせるというのも、膨大な知識量を誇っていたとリードが語るシュヴァルツの姿に重なる。このように、「マイ・ハウス」に「レイヴン」を重ねてみると、大鴉をシュヴァルツの‘spirit’の象徴として読むことができるのである。

「マイ・ハウス」の歌詞に戻って、③「輝くばかりの誇らしい名前」が呼び出される点に注目したい。男が呼び出した対象の名前に対して特に注意を払うのは、「レイヴン」第8連において、‘Ghastly grim and ancient Raven wandering from the opiate shores / Tell me what thy lordly name is, that you are not nightmare sewage (この世のものとも思えぬ恐ろしげな古の大鴉、阿片の彼岸より迷い出たる / 語るがいい、貴様のその威風堂々たる名を、悪夢のように汚れた水ではないのだということを)’ (498)のように、大鴉に対して名前を問う構図にも対応する。

歌詞の後半では、呼び出した魂がそのまま屋敷に留まり、魂の存在を受け入れた‘My house’が④‘Our house’になって幕を閉じる。「レイヴン」でも、ここから去れという男の命令に対して大鴉は‘Nevermore’と答えてそのまま部屋に留まり、最後は第13連‘But the Raven, never flitting, still is sitting, silent sitting, (...) And the lamplight o’er him streaming throws his shadow to the floor. (...) And my soul shall not be lifted from that shadow. / Nevermore! (しかしその大鴉、羽ばたくこともなく、そこに止まったまま、静かに止まったまま、ランプが彼奴に灯りを投げかけ、床にその影を落とす (...)) そして我が魂は

その影より浮かび上がることはないだろう/ ネヴァーモア!)’ (500)のように、大鴉の影に男の魂が捕らわれ、そこから浮かび上がることはもうない、となり幕を閉じる。どちらの作品でも男と「魂」の融合が表現されている。これは「マイ・ハウス」と「レイヴン」のどちらにおいてもシュヴァルツの存在を肯定しようとするリードの姿勢と取れる。

以上のようにふたつの作品を比較すると、「マイ・ハウス」の中には「レイヴン」と共通し、その原型と呼べるような演出がいくつも見られる。双方の演出が完全に対応しているわけではないものの、「レイヴン」は「マイ・ハウス」の構造を『大鴉』に重ね合わせ、それを発展させたものと考えられるのだ。シュヴァルツが 1966 年に逝去した後、リードは文学者ではなくミュージシャンとして世界的な成功を収めるが、その後も折にふれて恩師を称える発言を残している。例えば 2007 年にシラキュース大学から文芸創作における功績を認められ、ジョージ・アーレンツ最高名誉賞 (The George Arents Award) を授与された際のスピーチでも、‘I hope, Delmore, if you’re listening, you are finally proud, as well. My name is finally linked to yours in the part of Heaven reserved for Brooklyn poets. (デルモア、もしこの声が届いているのなら、やっと喜んでもらえるでしょう。この名がとうとう結びついたので、ブルックリンの詩人たちが名前を連ねた、その天国にあるあなたの名に)’ (Enslin)と述べ、シュヴァルツの名を挙げて謝意を示している。リードが音楽家としての道を選んだ後も、生涯にわたってシュヴァルツを尊敬し続けていたことが分かる。自らを詩人と自負するリードが『大鴉』の翻案に取り組んだ際、その中にシュヴァルツに捧げた「マイ・ハウス」と共通する構造を見出し、これを用いて今一度詩という純粋な文学形式で亡き師への弔意を示したのが「レイヴン」であった。

4. 「レイヴン」の音韻にあらわれるシュヴァルツへの想い

最後にリードが「レイヴン」の音韻に込めた想いについて見ていきたい。「レイヴン」では‘more’という単語がリフレインとして何度も繰り返されている。『大鴉』にも‘more’のリフレインは 18 連中 19 回出てくるが、それに対して「レイヴン」では 13 連中に 19 回出てくる。単語の出現回数自体は変わらないが、原作では詩の行数が全 108 であるの

に対して、翻案では全 87 に短縮されており、作品の総単語数における‘more’の数が相対的に増えている。つまり原作と比較して‘more’の使用が目立っているのだ。また『大鴉』ではほぼすべての‘more’が各連の最終行に置かれるのみであるのに対し、「レイヴン」では最終行以外にも配置されている。そのため「レイヴン」を読むと、‘more’という音が「大鴉」よりも印象的に響いてくる。リードが故意に‘more’の数を増やしているのはあきらかである。これはリードが‘more’のリフレインにシュヴァルツの名をイメージして重ねているものと考えられるのだ。シュヴァルツのファーストネームは Delmore である。この Delmore の more という音が、リフレインの‘more’と韻を同じくして響きあい、師への呼びかけとなっているのである。リードはシュヴァルツの名前を特に大切なものと考えていた。例えば「マイ・ハウス」の中でも「誇り高く誰にも恥じることのないその名」とデルモアの名前を讃えていることや、ジョージ・アーレンツ賞受賞スピーチの引用でも「自らの名がデルモアの名に繋がった」と述べていることから、リードがシュヴァルツの名前を特に誇りにしていたことが分かる。先に引用した「レイヴン」第 8 連で、男が大鴉に対して「語るがいい、貴様のその威風堂々たる名を」と呼びかけるのも、大鴉がシュヴァルツの象徴であればこそそのものと考えられる。リードにとって、『大鴉』のリフレインである‘more’が‘Delmore’と響き合ったのは必然であり、これを翻案に活かさない手はなかっただろう。「レイヴン」における‘more’のリフレインは純粋な詩的效果を果たすのみならず、シュヴァルツに対するリードの敬愛の念が込められているのである。

結

リードは「レノアを悼む男」という原作のテーマを翻案の骨子として活かし、そこに恩師を悼む自らの姿を重ねて弔意を示した。その際原作の大鴉の象徴性をさらに強調し、これにシュヴァルツの姿を重ねあわせて新たに翻案の大鴉を創造し、師の無念をその象徴として表現している。また「レイヴン」はリードにとって、かつてシュヴァルツに捧げた「マイ・ハウス」の再構築でもある。そこには翻案という文芸創作活動をもってし

て、今一度その創作の師であるシュヴァルツへの謝意を示そうとする、詩人としてのリードの気概が表現されている。「レイヴン」がシュヴァルツに捧げられた作品であるという特別な意味があるのなら、舞台作品から CD、そして 2 度の書籍化と、同じ作品が 4 度にわたって発表された経緯を説明する理由のひとつともなり得るだろう。「レイヴン」の改訂出版は 2012 年であり、翌年に逝去するリードの遺作でもあることも注目に値する。最後に遺した作品が音楽ではなく詩集であったというのは、自らを何よりも詩人だとしたリードにふさわしい遺作であり、それはまたシュヴァルツへの変わらぬ思いがリードの中にあり続けたとことの証左でもある。

参考文献

- Baker, Chris. "Lou Reed's Lasting Legacy at Syracuse University: A Criminal, a Dissident and a Poet." *Syracuse. Com.* 1 Jun. 2015.
http://www.syracuse.com/entertainment/index.ssf/2013/10/lou_reed_syracuse_university.html
- Blue in the Face*. Dir. Wayne Wang and Paul Auster. Perf. Harvey Keitel, Victor Argo, Giancarlo Esposito, Michael J. Fox and Lou Reed. Miramax Films, 1995.
- Enslin, Rob. "Doin' the Things That He Wants to." *Through the Jungle*. 1 Jun. 2015.
<http://www.throughthejungle.com/clients/art-sci/loureed.html>
- Harrison, James A, ed. *The Complete Works of Edgar Allan Poe*. Vol. 2. NY: AMS Press, 1979.
- Katz, Larry. "Lou Reed 2003." *The Katz Tapes*. 1. Jun. 2015.
<http://thekatztapes.com/lou-read-2003/>
- Marcus, Greil. "Interview with Lou Reed." *Greilmarcus.net*. 1 Jun. 2015.
<http://greilmarcus.net/2014/07/18/interview-with-lou-reed-0303/>
- Poe, Edgar Allan. Gen. ed. David Galloway. *The Fall of the House of Usher and Other Writings*. London: Penguin Books, 2003.
- Reed, Lou. *Lou Reed: The Last Interview: and Other Conversations*. NY: Melville House, 2015.
- . *Pass Thru Fire: The Collected Lyrics*. Cambridge: Da Capo Press, 2008.
- . *The Raven*. Seattle: Fantagraphics Books, 2012.
- Schwartz, Delmore. *In Dreams Begin Responsibilities and Other Stories*. NY: New Directions, 2012.
- Simon, Alex. "Lou Reed Quoths the Raven." *The Hollywood Interview*. 1 Jun. 2015.
<http://thehollywoodinterview.blogspot.jp/2008/02/lou-reed-hollywood-interview.html>
- Smith, Lee. "How Delmore Schwartz Saved My Life." *The Scroll Tablet Magazine on the News*.

1 Jun. 2015. <http://tabletmag.com/scroll/146475/how-delmore-schwartz-saved-my-life>

“Syracuse University Remembers Lou Reed '64.” *Syracuse University News*. 1 Jun. 2015.
<http://news.syr.edu/syracuse-university-remembers-lou-reed-64-93540/>

Wiederhorn, John. “Lou Reed’s Obsession With Edgar Allan Poe Spawns *The Raven*.” *MTV News*. 1 Jun. 2015. <http://www.mtv.com/news/1459300/lou-reeds-obsession-wiith-edgar-allan-poe-spawns-the-raven/>

安倍晴政編『文藝別冊—追悼ルー・リード』河出書房新社、2014 年

加藤祥造編『ポー詩集—対訳』岩波書店、1997 年

坪内祐三『変死するアメリカ作家たち』白水社、2007 年

ドゲット、ピーター『ルー・リード—ワイルド・サイドを歩け』奥田祐士訳、大栄出版、
1992 年

ハーヴァード、ジョー『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』中谷ななみ訳、
スペースシャワーネットワーク、2010 年

宝喜力『英米の名詩』泰文堂、1975 年

ポー、エドガー・アラン『ポオ評論集』八木敏雄編訳、岩波書店、2009 年

——『黄金虫・アッシャー家の崩壊—他九篇』八木敏雄編訳、岩波書店、2006 年

村上春樹他編訳『And Other Stories』文芸春秋、1988 年

山崎洋一郎他編『ロッキング・オン』014 年 1 月号、ロッキング・オン

山本充他編『ユリイカ』2014 年 1 月号、青土社

リード、ルー『ニューヨーク・ストーリー: ルー・リード詩集』梅沢葉子訳、河出書房
新社、2012 年

注

1. 本稿は日本英語表現学会第 44 回全国大会における口頭発表に加筆し、論旨を再構成したものである。
2. 本稿では原作と翻案の混同を避けるため、ポーによる原作の *The Raven* を『大鴉』、リードによる翻案詩“The Raven”を「レイヴン」と表記する。なお英語引用文の下線と和訳、および和訳の下線は、ことわりのない場合すべて筆者による。
3. ヴェルヴェット・アンダーグラウンドの歌詞が当時の音楽シーンに与えた影響については、例えばジョー・ハーヴァード『ヴェルヴェット・アンダーグラウンド&ニコ』などに詳しい。ヴェルヴェット・アンダーグラウンドやリードに関する考察は、今なお音楽誌や芸術誌等で散見される。同じくミュージシャンでありながらも 2016 年にノーベル文学賞を受賞したボブ・ディラン(Bob Dylan, 1941—)のように、今後リードの業績が文学面から評価される余地が充分にある。
4. 詩の創作に関するポーの基本的な態度は、「創作の哲理」(“The Philosophy of Composition”, 1846)をはじめ、芸術について論じた各エッセイにて表明されている。
5. 「レイヴン」は、2000 年にハンブルクで上映された舞台作品 *POEtry* を原案として創作されたものである。リードはその後 *POEtry* を音楽作品としてまとめ、2003 年に *The Raven* のタイトルで CD アルバムとして発表した。さらに 2012 年、*POEtry* と *The Raven* を補完するかたちで、イタリア出身のイラストレータであるロレンツォ・マトッティ(Lorenzo Mattotti, 1954—)の挿絵を加え視覚に特化した、決定版読本として *The Raven* が発表された。*The Raven* は、ポーに縁のある表現を用いたタイトルを有する詩を集めた詩集である。ここに収録された一篇に、原作『大鴉』の翻案である「レイヴン」(“The Raven”)が収録されている。
6. 日本国内では、シュヴァルツに関する資料がそう多くない中で、坪内祐三著『変死するアメリカ作家たち』のシュヴァルツについて論じた章は貴重である。本稿でシュヴァルツの人となりに触れた点は、本著に拠るところが大きい。またシュヴァルツの代表作「夢の中で責任が始まる」は、村上春樹編『and Other Stories』に畑中佳樹訳

が収録されている。

7. シュヴァルツに対するリードの賞賛は、詩人がシュヴァルツ短編集に寄せた序文や自身の詩集 *Pass Thru Fire* の序文、あるいは本稿参考文献中の各種インタビュー記事に見ることができる。またシラキュース大学ホームページには、リードに関する記事がまとめられており、その中でリードとシュヴァルツの関係についても伺い知ることができる。リードが 2007 年にジョージ・アーレンツ賞を受賞した際の記事と、2013 年に逝去した際の特集記事では、シュヴァルツがリードに与えた影響について触れられている。
8. 以下「レイヴン」の引用は、*Pass Thru Fire: The Collected Lyrics*. Cambridge: Da Capo Press, 2008。『大鴉』の引用は、*The Fall of the House of Usher and Other Writings*. London: Penguin Books, 2003。括弧内の数字はページ数を示す。